

嶋上遺跡群 35

小
群

2011

高槻市教育委員会

鳴上遺跡群 35

はしがき

平成22年度も、市内各所において、個人住宅の建設等に先立つ埋蔵文化財の調査を実施しました。本年度はとくに、調査指導検討会の指導を受けて平成20年度から実施してきました安満遺跡の京都大学農場内範囲確認調査により、弥生集落遺構の分布範囲を把握できたことにより、本年2月7日に当該範囲が史跡追加指定を受けました。自然地形と集落の土地利用の関わりや居住域・生産域・墓域の範囲が明確となるなど、これまでの調査で得られた貴重な成果は、今後の保存や整備・活用の基本資料となるものです。

高槻城跡では、二ノ丸跡にあたる城跡公園野球場において、確認調査を実施しました。江戸時代の建物礎石などは失われていましたが、高槻城絵図にみられる二ノ丸不明門の位置をはじめて確認することができたのをはじめ、導水施設などが検出され、二ノ丸御殿につながる知る手がかりを得ました。さらに高山右近が築いた高槻城の遺構とみられる堀跡も検出され、江戸時代や戦国時代の様子について多くの新知見を得ることができました。

市内遺跡の調査では、郡家今城遺跡や今城塚古墳において個人住宅の建設に関わる小規模な調査を実施しました。今後とも遺跡の規模や内容の把握に努め、埋蔵文化財の保存や調査に万全を期していくものです。

最後に、本書をまとめるにあたり、ご教示やご協力いただいた関係機関をはじめ、多くの方々に心から感謝申し上げます。

平成23年3月31日

高槻市教育委員会 文化財課

課長 鐘ヶ江 一朗

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が平成22年度国庫補助事業として計画、実施した高槻市所在の史跡・鶴上郡衙跡附寺跡周辺部及び市内遺跡の発掘調査事業（総額15,000,000円）の概要報告書である。
2. 事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成22年4月1日に着手し、平成23年3月31日に終了した。
3. 調査は、高槻市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センターがおこなった。本書の執筆・図面作成・製図は、宮崎康雄、高橋公一、橋本久和、早川圭、内田真雄、今西康宏、西村恵祥、佐伯めぐみ、濱野俊一、池田理美がおこない、分担は文末に記した。遺構の写真撮影は早川・西村が担当した。整理作業については以下の各氏が参加した。厚く感謝する。

西岡和江、梅靖代、前田幸美、瓦林三千代、立岩美津子、藤岡恭子
4. 調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

国立大学法人京都大学

目 次

I 郡家今城遺跡.....	1
II 今城塚古墳.....	2
III 安満遺跡範囲確認調査.....	3
IV 高槻城跡確認調査.....	16
V 出土遺物保存処理.....	32

No.	遺 跡 名 (地区)	調 壱 地	面 積 (m ²)	届 出 者
1	郡家今城遺跡(2010 - 1)	郡家新町147-8	86.88	個 人
2	今城塚古墳(2010 - 2)	氷室町1丁目564番1	523.24	個 人
3	安 満 遺 跡(範囲確認調査)	八丁畷町196-1、197ほか	140.00	高槻市教育委員会
4	高 槻 城 跡(確 認 調 査)	野見町1492-1	300.00	高槻市教育委員会

I. 郡家今城遺跡

1. 郡家今城遺跡（2010-1）の調査

調査地は高槻市郡家新町147-8にあたり、小字名は「藤ヶ本」である。現状は宅地である。遺跡は女瀬川東岸に位置する奈良時代から平安時代時代の集落である。これまでの調査で木簡・墨書き土器や三面庇の建物が検出されており、隣接する島上郡衙に関係が深い集落として考えられている。

調査は個人住宅建設工事に先立って実施したもので、土層の観察と遺構の確認をおこなった。

層序は盛土（0.8m）、暗灰褐色粘土質細砂層〔旧耕土〕（0.15m）、黄褐色粘土質細砂～シルト層〔旧耕土以前の盛土〕（0.35m）、灰色粘土層〔地山〕である。地山面の灰色粘土層上面において精査を行なったが、遺構・遺物は検出されなかった。
（今西）



図1 郡家今城遺跡（2010-1）調査位置図

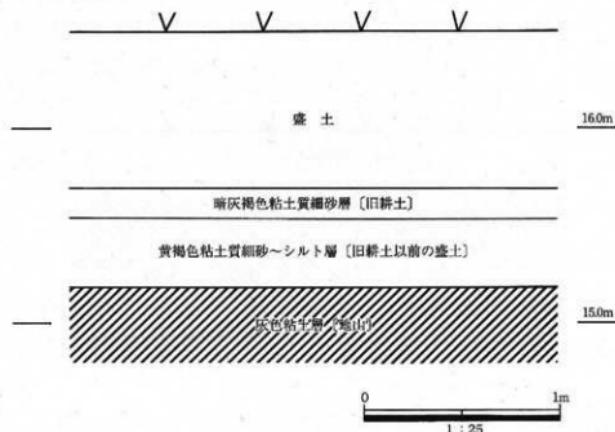


図2 郡家今城遺跡（2010-1）土層模式図

II. 今城塚古墳

1. 今城塚古墳（2010-2）の調査

調査地は高槻市氷室町1丁目564-1で、小字名は「東野」である。現状は宅地である。史跡今城塚古墳に西接する位置にあり、外堤の存在が想定される部分にあたる。今城塚古墳の外堤については、現存する後円部の状況などから、外濠の外側の全周にわたり構築されていたと考えられている。今回、前方部側における外堤の状況を確認するため、発掘調査を実施した。

層序は盛土（0.2m）の下部は、黄灰色粘質土の地山となり、外堤を構築する盛土等は検出できなかった。また、この黄灰色粘質土の上面に、耕作の痕跡の小溝がみられ、地山そのものも一定の削平を受けたことが想定される。遺物も全く出土しなかった。

以上のように今回の調査では、今城塚古墳前方部側の外堤は、地山一体としてすでに削平されていることが判明した。
(内田)



図3 今城塚古墳（2010-2）調査位置図

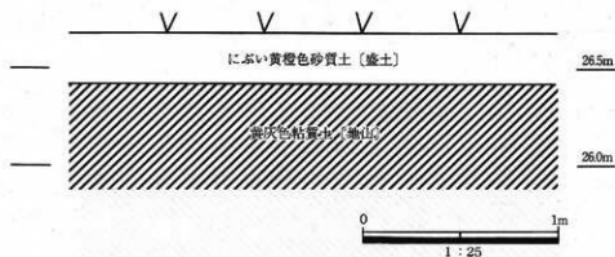


図4 今城塚古墳（2010-2）土層模式図

III. 安満遺跡範囲確認調査

1. はじめに

安満遺跡は淀川の北岸、北摂山地から流れ出た松尾川が形成した扇状地の先端に位置している。昭和3年（1928）、京都帝国大学農学部附属摂津農場（京大農場）の開設によって発見され、出土した弥生土器の分析から、北部九州に成立した弥生文化がいち早く近畿地方まで伝わったことが、初めて立証されている。昭和40年代には宅地造成が進み本格的な発掘調査が次々と行なわれるようになつた。農場北側では弥生時代前期の環濠が2条発見され、その中からは土器や石器とともに、鎌や鉤、斧の柄などの豊富な農工具と未成品、赤漆塗りの桶とカンザシなど、当時の暮らしぶりがうかがえる豊富な遺物が出土した。

その後も調査が行われ、東西約1500m、南北約600mの範囲に、生活の中心となる居住域、水田と井堰・用水路などで構成される生産域、方形周溝墓が広がる墓域という集落の基本構成がそろっているだけでなく、弥生時代前期から後期まで全期間にわたって集落が営まれたことが明らかになった。このような経過を経て、平成5年（1993）には農場北側の東西600m、南北100mの範囲が国の史跡指定を受けて恒久的な保存が図られている。

平成20年度からは、京大農場内の遺構分布状況を把握するために確認調査を継続実施している。調査は広範囲にわたるため、発掘調査の前に地中レーダー探査とボーリング調査をおこない、微地形や土壤の状況を確認した。結果、農場内は事務所付近に微高地が形成され、西側には深い低湿地が広がるとともに、東側には南から北に向かう谷が入りこみ、農場東隅にかけては再び微高地が広がることが明らかになった。発掘調査では明確に遺構の分布する微高地を中心に進めた結果、弥生時代前期から中期にかけての環濠、中期の住居跡や方形周溝墓などを検出している。なかでも環濠は、前期の早い段階から継続して何度も掘削され、東西約160m、南北約170mの範囲を取り囲んでいたことが明らかになっている（平成20・21年度の調査成果については『嶋上遺跡群33』・『同34』を参照）。



図5 安満遺跡位置図

平成22年度は、微高地の縁辺部を中心に調査区を設定して発掘調査を実施した（図6・7）。また、各トレンチやボーリングによって採取した土壤試料について植物珪酸体の分析を実施した。



図6 地中探査成果と今回の発掘調査位置図（遺跡中心部）

2. 西地区の調査（図版第2）

西地区には低湿地と微高地との間に5ヶ所の調査区を設け、居住域のひろがりや生産域の状況について調査を行なった。B-4トレンチでは、ゆるやかに南へ向かって下降する地形となっており、弥生時代前期に相当する粘質土層と畦状の高まりを一条検出した。粘質土層はトレンチの北端から南に広がるもの、中央部で途切れ、その先は低湿地となっていた。いっぽう、畦状の高まりは幅15cm、高さ3cmの台形上の断面を呈するもので、東西方向に続いている。この遺構は弥生時代前期の相当層にあたり、同層からはイネ科のプラントオバールを検出していることから、水田遺構と考えられる。



図7 調査区配置図

B - 5 トレンチでは東西方向の幅3.5m、深さ0.7mの弥生時代中期の溝10を検出した。この延長上にあたる20m東側のB - 1 トレンチでは、平成21年度に同規模の溝9を検出しておらず、両者は同一の溝と考えられる。

B - 6～8 トレンチは微高地西側の状況を探るために設定したが、自然流路を検出した以外には明確な遺構・遺物は確認できなかった。各トレンチはいずれも砂や粘土が堆積する低湿地となっており、南へ向かって徐々に下降する地形になっていた。

3. 東地区的調査（図8・図版第3・4）

農場東半部にあたる東地区には6ヶ所の調査区を設け、谷地形の状況と墓域の広がりを追求した。

微高地と谷の境を探るため、A - 4～6 トレンチを設定した。A - 4 トレンチでは微高地側に弥生時代中期の柱穴や土坑がわずかに分布するものの、谷にむかっては自然流路を検出した以外、遺構・遺物とも希薄になる。A - 5 トレンチでは北東から南西へと流れる溝10・11・12を検出している。幅は1.2～2.1m、深さ0.5～0.9mを測る弥生時代中期の溝である。トレンチの西側のA - 3 トレンチでは平成21年度にも中期の溝8を検出しておらず、周辺では4条以上の溝が掘削されていたことになる。いっぽう、谷の出口に設定したA - 6 トレンチでは自然流路を検出した以外に遺構・遺物は認められなかった。

A - 7・A - 8 トレンチは、谷の奥部を探るため最も北側に設定したものである。調査の結果、南へ向かって下降する低湿地の自然堆積土層を検出し、トレンチの北側まで谷地形が及んでいたことを確認した。

農場東縁部に展開する墓域では、平成21年度に5 トレンチで弥生時代中期の方形周溝墓1・2を検出している。この墓域の西限を確認するため、A - 9 トレンチを設定した。調査の結果、微高地状の地形と自然流路を確認したものの、方形周溝墓は確認できなかった。トレンチ西端部では自然流路や溝状遺構を検出したことによって、墓域の西限が確定するとともに、居住域と墓域の間には谷状の低湿地が広がり、ここには自然流路が錯綜する流路帯ともよぶべき谷地形となっていたことを確認できた。

(早川)

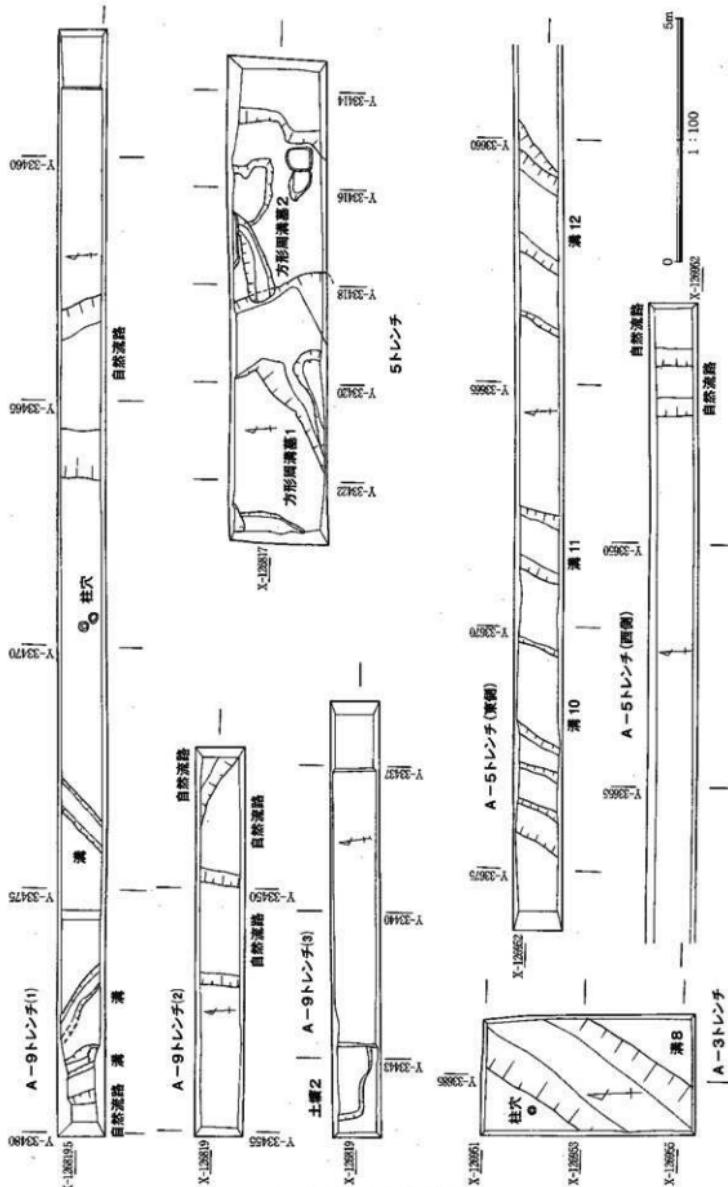


図8 東地区調査区平面図

4. 出土遺物（図9～13・図版第5）

今回、報告する出土遺物は主要な各トレンチから出土した遺構や形成時期を知るうえで重要となる堆積層の遺物を細片であっても取り上げている。特に、これまでの調査で判明している弥生時代前期環濠が同期末の洪水堆積によって覆われた終焉直後の様相を示す3-2トレンチの弥生時代中期初頭の土器群。また、弥生時代中期環濠についてもA-3トレンチの溝8の各層から出土した土器や石器などの遺物から中期の安満遺跡の集落変遷を知るうえでのポイントになる資料を報告する。

土器・石器（図9～13）1～3は3-2トレンチから出土した壺である。1と3は溝5から出土しており、2は弥生時代前期の遺構直面上に堆積した層から出土している。1は口縁部が短く外反し、頸部には削出突帯、胴部上半にヘラ描直線文2条を施し、部分的に赤色彩文が残存する。2は小形の壺で頸部から胴部にかけてヘラ描直線文と重弧文が施される。3は頸部と胴部上半にヘラ描直線文を施している。

4～12は3-2トレンチの洪水堆積層直上で検出された土器群である。4～7は体部外面を主に縱方向にハケ調整し、口縁内面を横方向にハケ調整している。口縁部に刻目を施すもの（5～6）もあるが、いずれも摂津型aの壺である。8～9は口縁内面をヨコナデで調整しており摂津型bの壺である。10は摂津型aの壺ながら口縁内面をヨコナデで横方向のハケ調整を消して仕上げている。11は摂津型の壺で、12は壺蓋である。この土器群は摂津II-1～3様式の範疇に収まる一括資料である。

13～22はA-3トレンチの溝8上層から出土した土器である。口縁部に凹線文を施した短頸壺（13）、有段口縁の壺（14）、高杯の杯部と脚部（15・19）、大型鉢または台付鉢（16）、口縁外面を凹線文と斜格子文で飾る無頸壺（17）、口縁部に凹線文と体部に粗いハケ調整を施した短頸壺または水差（18）と大型品から小型品の壺（20～22）である。23は同溝の上層～中層から出土した口縁部外面に綾杉文、内面に2列の扇形文を施す広口壺である。

24～30は中層～下層から出土した土器である。口縁部無文と口縁部外面を波状文、内面に扇形文を施す広口壺（24～25）、「く」字状に外反する口縁部をもつ壺（26～27）、摂津型の系譜をひく壺（28～30）などで摂津II様式～摂津III様式の土器で構成されている。31は溝底から出土した広口壺である。32は溝の西側肩部で出土した高杯の脚部である。33は溝8中層から出土した磨製石鎌である。全体を丁寧に研磨しており粘板岩製である。

34～36は5トレンチの方形周溝墓から出土した土器である。（34）と（36）は方形周溝墓1から出土した。体部を斜め方向のハケ調整、口縁内面を横方向にハケ調整しており、底裏に木の葉痕を残す摂津型aの壺である。35は方形周溝墓2から出土した摂津型bの

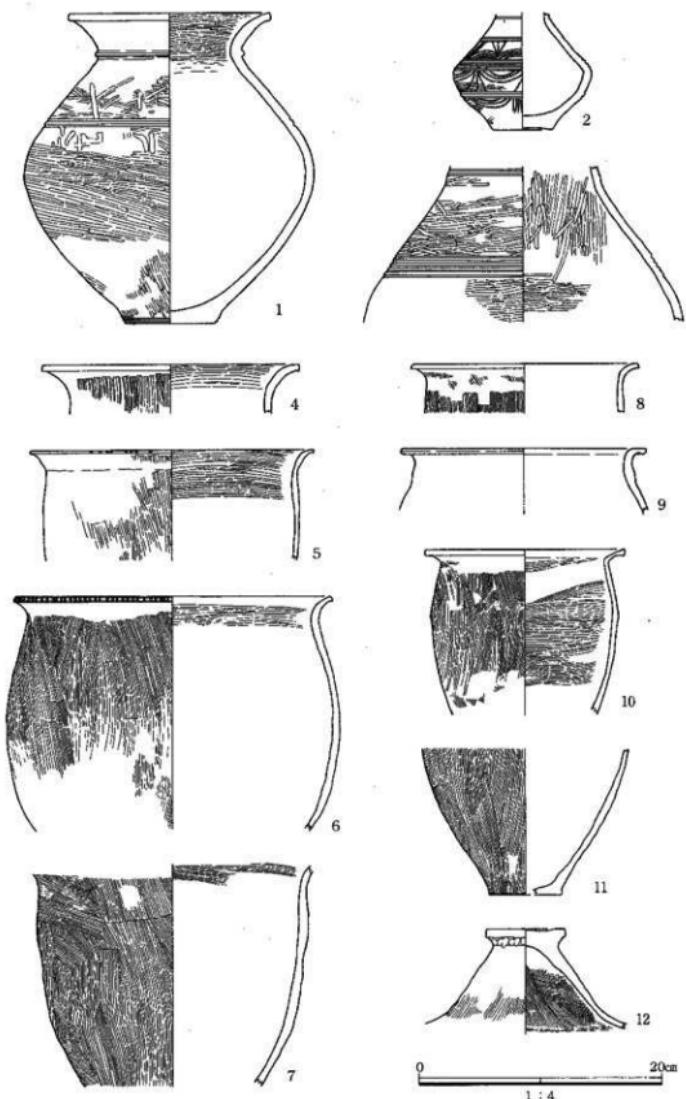


図9 3-2 トレンチ出土遺物

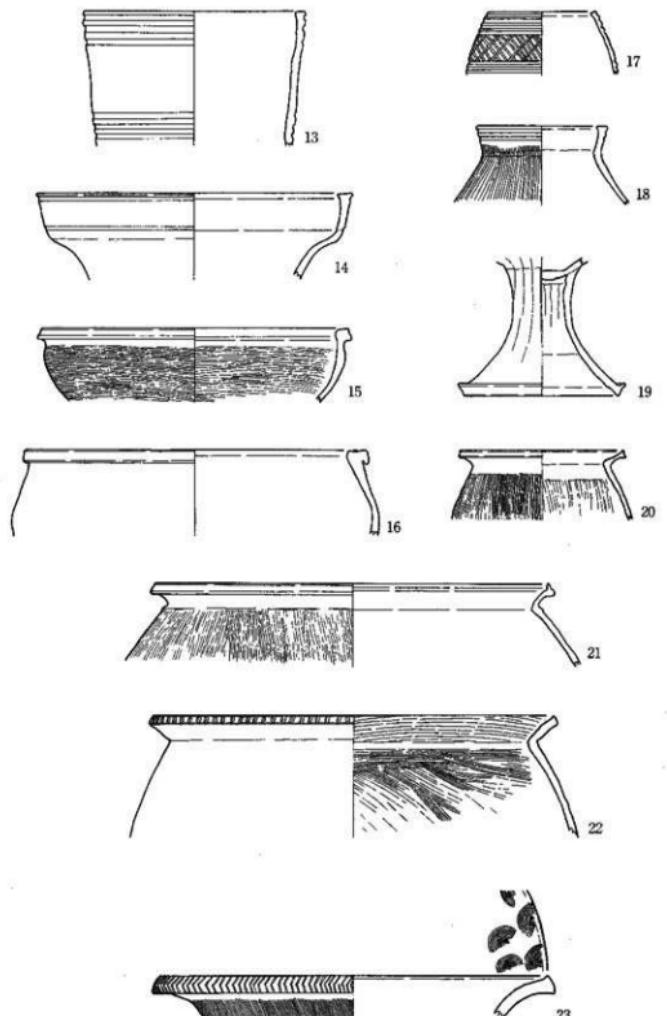


図10 A-3 トレンチ出土遺物 (1)

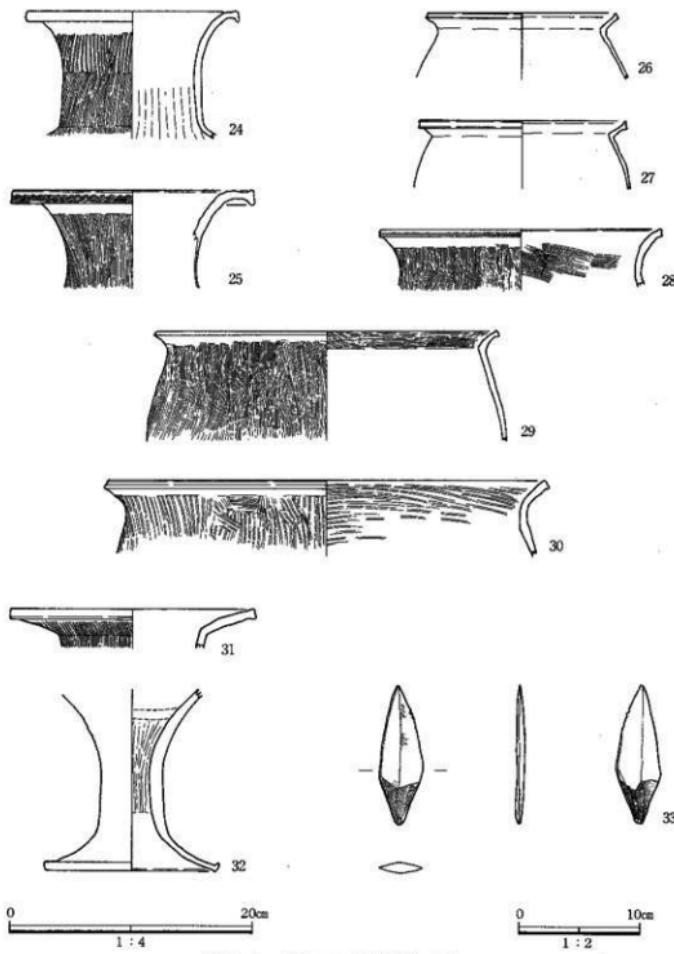


図11 A-3 トレンチ出土遺物（2）

壺である。36は口縁部に波状文を施す広口壺である。両方形周溝墓から出土した土器は
摂津II-2・3様式の範囲に収まる資料である。

37-41はA-9トレンチの土坑1から出土した庄内式併行期の古式土師器の壺と壺である。37は讃岐地域からの搬入された角閃石を含む茶褐色の壺である。安満遺跡での出

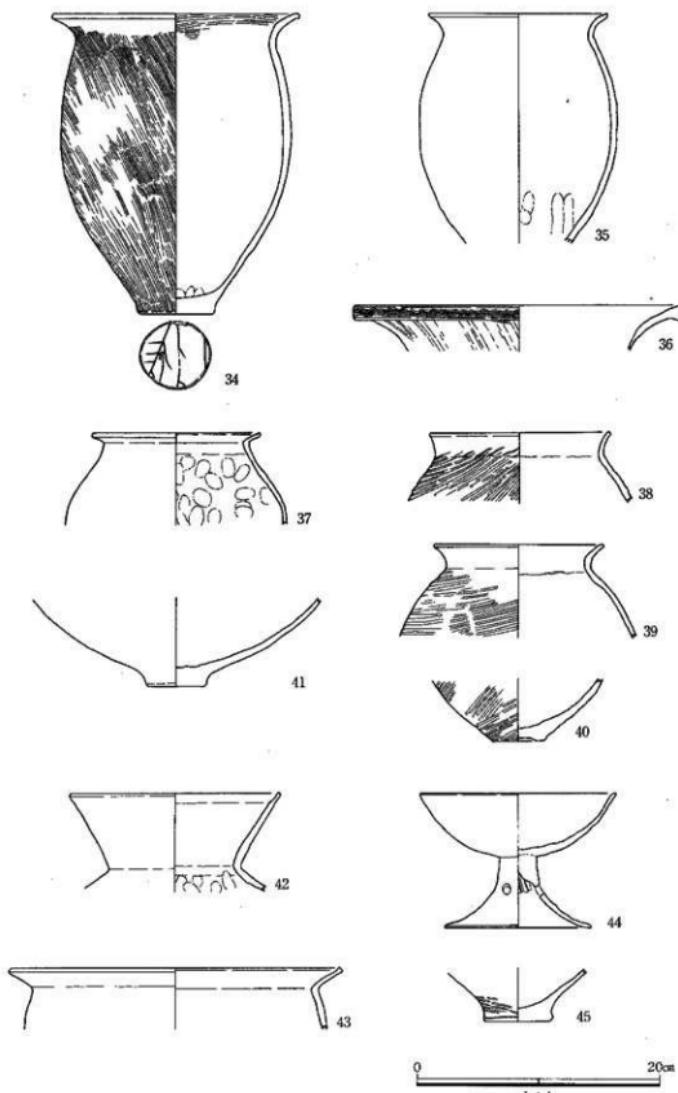


図12 5・A-9 トレンチ出土遺物

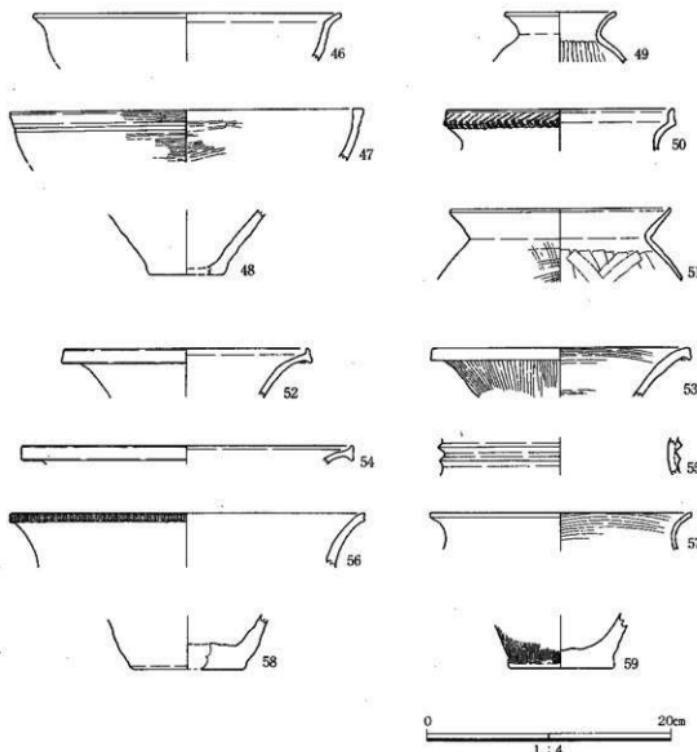


図13 A-5・B-1・B-5 トレンチ出土遺物

土は初例ある。38~40は畿内の伝統的なタタキ手法による弥生形壺である。42~43はA-9トレンチの土坑2から出土した布留式の直口壺と壺である。44~45はA-9トレンチの自然流路から出土した弥生時代後半の高杯と底部である。

46~51はA-5トレンチから出土した土器である。46は溝10下層で出土した鉢である。47は溝10の埋土から出土した高杯の杯部で口縁部直下に凹線状の沈線を巡らせて段上部を表現している。48は溝11の埋土から出土した底部である。

49~51は溝10が埋没した後に堆積した遺物包含層から出土した土器である。49は庄内式併行期の短頸広口壺である。50は弥生時代中期後半の近江系受口状口縁の壺で口縁部外面上端を刺突列点文、下端は刻目を施している。50は布留式の壺である。

52~58はB-5トレンチの溝13の埋土から出土した土器である。52~55は弥生時代中期中頃の広口壺の口縁部と頸部である。56~57は弥生時代中期前半の壺の口縁部である。59はB-1トレンチの溝9の加工層から出土した底部である。

(濱野)

4.まとめ(図14)

今回の調査では、居住域を中心とした遺跡の微地形と土地利用の状況が明らかになった。居住域は弥生時代前期から中期にかけて、北から南へ突出した微高地を中心にひろがっていることを確認している。その東西両側は低湿地がひろがり、生活の痕跡をうかがうことはできない。東側は昨年度に確認した中期の墓域との間が谷地形となって、南北方向に幾筋もの自然流路が貫く流路帯ともいえる状況であった。中期の環濠は微高地からその低湿地へ下りた場所に掘削されていた。居住域の西側では京大農場からさらに西方へと低湿地が続き、広大なヨシ原ともいべき状況を呈していた。

生産域については土壤調査によって、微高地が谷地形や低湿地へと落ち込むところでは粘土質の土壤がとりまいていたことが明らかとなっている。また植物珪酸体の分析では、弥生時代前期の土層において、微高地をとりまくように稻作を示すイネのプラントオバールを検出している。このことから安満遺跡では、これまでの想定よりもさらに限られた微高地縁辺部という範囲のなかで稻作をおこなっていたと考えられる。そこに隣接する東の谷地形の開口部では、弥生時代前期のうちから水位を調整する井堰を設けるなど積極的な土地の活用をおこなっていたことも伺える。

墓域については東部方形周溝墓群と谷地形との間に空閑地が存在することなど、その広がりの一端をあきらかにすることことができた。

以上のように、発掘調査に加えて土壤ボーリングや地中レーダー探査を実施したことによって、弥生時代の微細な地形とその土地利用の状況を広範囲に捉えることが可能となつた。居住域が立地する舌状の微高地の縁辺部に水田が営まれ、その西側は低湿地が広がり、また東側には墓域との間に、流路帯と仮称する低地が存在することなど、当時の景観を具体的に想定できる。安満遺跡で遺構分布範囲と微地形との関係を有機的に把握できたことは、弥生時代の集落成立時の集落景観の具体的な想定を進めるうえでも大きな成果である。

三ヵ年にわたる確認調査によって、集落を構成する居住域・水田域・墓域の遺構を確認した部分(図14 弥生時代の遺構分布範囲)について、高槻市では平成22年8月31日に国へ史跡追加指定の意見具申をおこない、平成23年2月7日付で追加指定された。(早川)

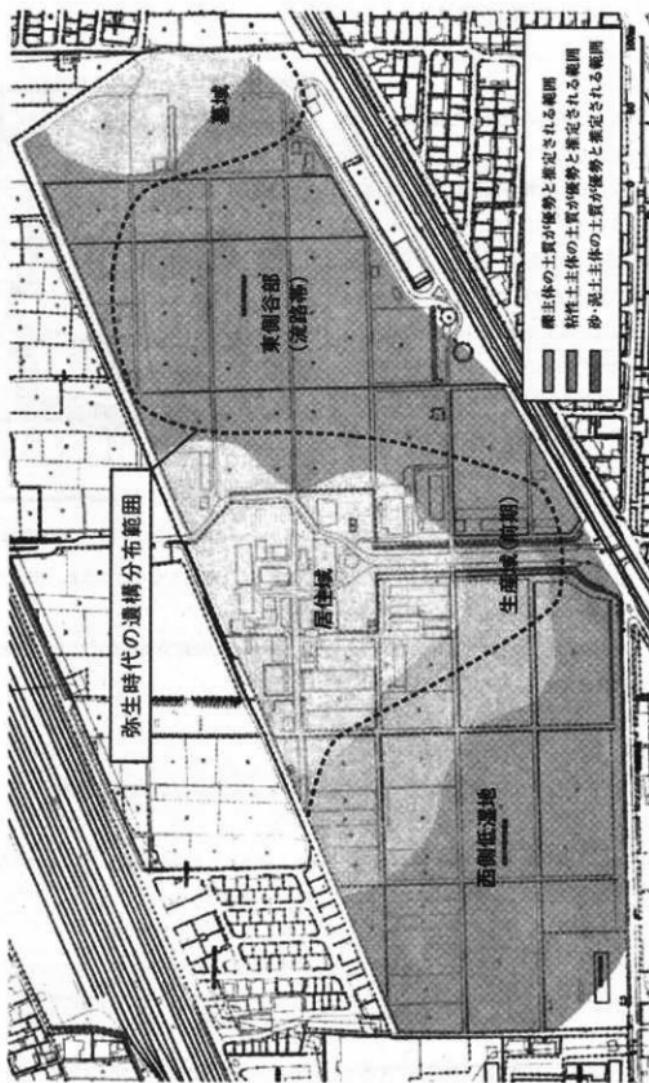


図14 安満遺跡の土壤と遺構の分布状況

IV. 高槻城跡確認調査

1. はじめに

高槻城は芥川の形成した扇状地の末端部に築かれた平城である。ここが本格的な城館として整備されたのは織田信長配下の武将・和田惟政が入城した永禄12（1569）年以降とみられる。天正年間（1573～1592年）にはキリシタン大名・高山右近が城主となり、城域が拡張され、堀と城壁に囲郭される広大な城に整備された。元和3（1617）年には幕府による大規模な改修、城域の拡張が行われ、三層の天守をそなえ、高石垣と土居がめぐる本格的な近世城郭となる。その後、寛永12（1635）年に出丸が増築され、城域の拡張整備は完了した。しかし、明治7（1874）年に廃城となり破却され、現在では地名や道路などの地割に当時の様相を留めるにすぎない。

今回、高槻城二ノ丸跡の具体的な内容を明らかにし、今後の城跡公園整備に対応するため、確認調査を実施して遺構の分布状況を把握した。

2. 絵図からみた二ノ丸と調査地（図15）

調査地は城跡公園野球場に位置し、高槻城二ノ丸跡北半部および北側の内堀にあたる。調査区の設定に際しては現存する絵図を参考にした。

町間入高槻絵図（仏日寺蔵、18世紀前半）から読みとれる構築物の配置および規模を列記すると、二ノ丸は東西63間（113.4m）、南北50間（90m）の敷地をもち、その内部に城主御殿が建てられていたとされる。南辺を除く三辺には土居が囲み、その上には築地塀がめぐらされていた。本丸側の南辺には低い土居があるが、築地塀はみられない。

二ノ丸東辺南側には石垣で囲まれた枡形門があり、橋を介して腰郭へ通じていた。枡形門東側の内堀法面には高さ3間（5.4m）の石垣が積まれていた。枡形門の規模は東西10間（18m）、南北9間（16.2m）であり、内堀に面して高麗門、北面には門櫓が設けられていた。北西隅部には櫓があり、規模は一辺が4間（7.2m）、5間（9m）である。北

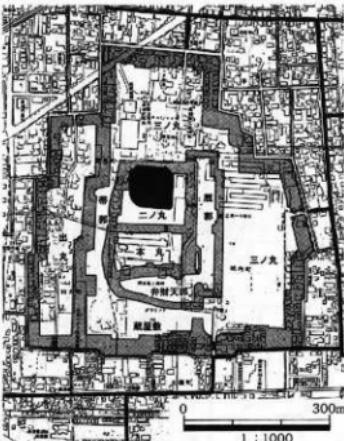


図15 高槻城跡（2010-1）調査位置図

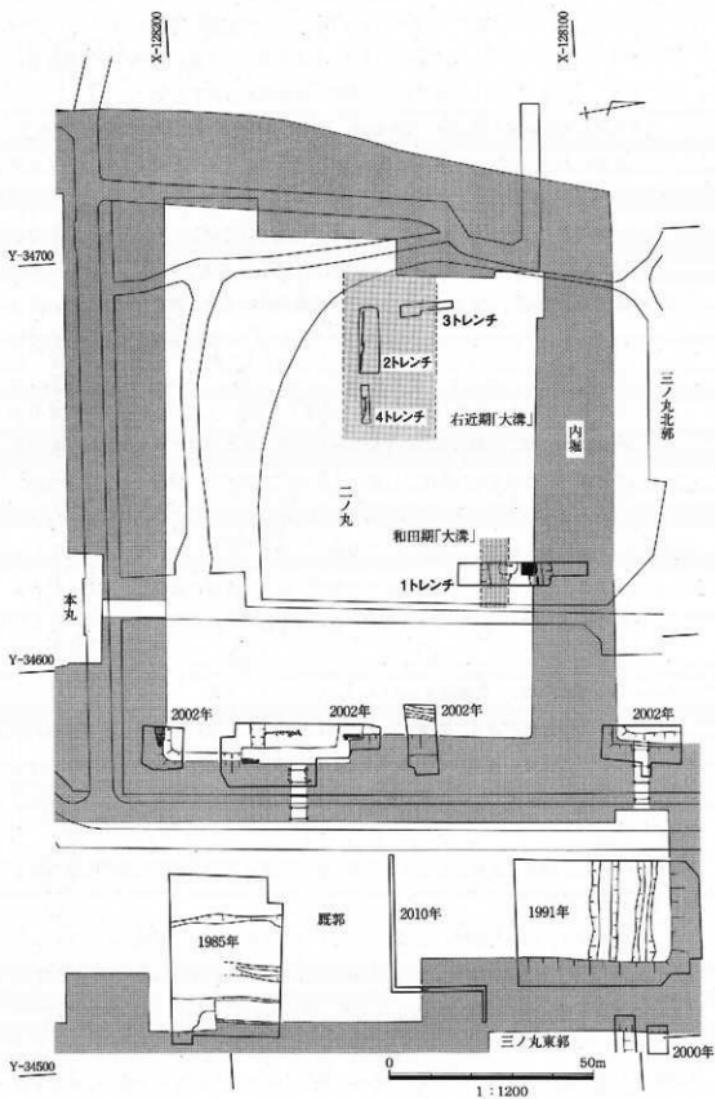


図16 トレンチの配置と周辺の遺構

辺中央部には不明門（あかずのもん）があり、内側にはLの字形に高石垣がめぐっており、規模は8間（14.4m）、6間（10.8m）である。内堀に面して高麗門があり、内堀法面には高さ3間半（6.3m）の石垣が積まれていたが、橋は架けられていない。

二ノ丸を囲む堀は南側で幅13間（23.4m）、その他の部分では12間（21.6m）であり、深さは1間半（2.7m）である。土居の高さは南側で1間、その他の部分では4間5尺である。

こうした絵図からうかがえる状況をふまえて、調査では当初2ヶ所にトレーニングを設定し、遺構の広がりを確認するため2ヶ所追加して行った。1トレーニングは二ノ丸北辺にあった不明門推定地に設定し、2トレーニングは二ノ丸御殿西辺中央部と想定される位置に設定した。3・4トレーニングは2トレーニングで確認された「大堀」の規模を確認するために設定した。

調査の結果、1トレーニングでは、近世高槻城に関連する遺構としては、二ノ丸北辺にあった不明門の石垣の一部、内側の高石垣基礎部分の一部、内堀の横木列・護岸杭列などを検出した。戦国時代の高槻城の遺構としては「大溝」、室町時代の遺構としては柱穴群などを検出した。2トレーニングでは、近世高槻城に関連する遺構としては、竹箇管を用いた導水施設、土留板列を検出し、戦国時代の遺構としては「大堀」を検出した。3トレーニングでは2トレーニングで確認された「大堀」の北端部、柱穴、土壤を確認し、4トレーニングでは2トレーニングで確認された「大堀」、土留板列の広がりを確認した。

3.1 トレーニング（図17～22 図版第6・7）

1トレーニングでは近世高槻城に関連する遺構としては二ノ丸北辺にあった不明門の石垣の一部、不明門の内側の高石垣の基礎部分、内堀の横木列・護岸杭列などを検出した。戦国時代の高槻城の遺構としては「大溝」、室町時代の遺構としては柱穴群などを検出した。

不明門 不明門に関する遺構としては、内堀に面して造られた石垣、不明門内側の高石垣の基礎地業を検出した。

検出した石垣は、門の東端部分にあたる。掘方は南北約3.85m、東西3m以上、深さ2.2m以上あり、掘方の内堀側で石垣を検出した。高さ1.0m、幅2.5m、2段分である。下段の石は長さ約60cm、高さ約40cmであり、2石確認した。石と石との間には約40cmの隙間があり、直径10～20cmの河原石や一辺20cmの花崗岩破材が充填されていた。上段の石は長さ50～85cm、高さ50～60cm、奥行70cm以上のものであり、4石確認した。石材には矢穴が確認できるものがあり、長さは10cm、幅12cm、矢先幅は7cmで、

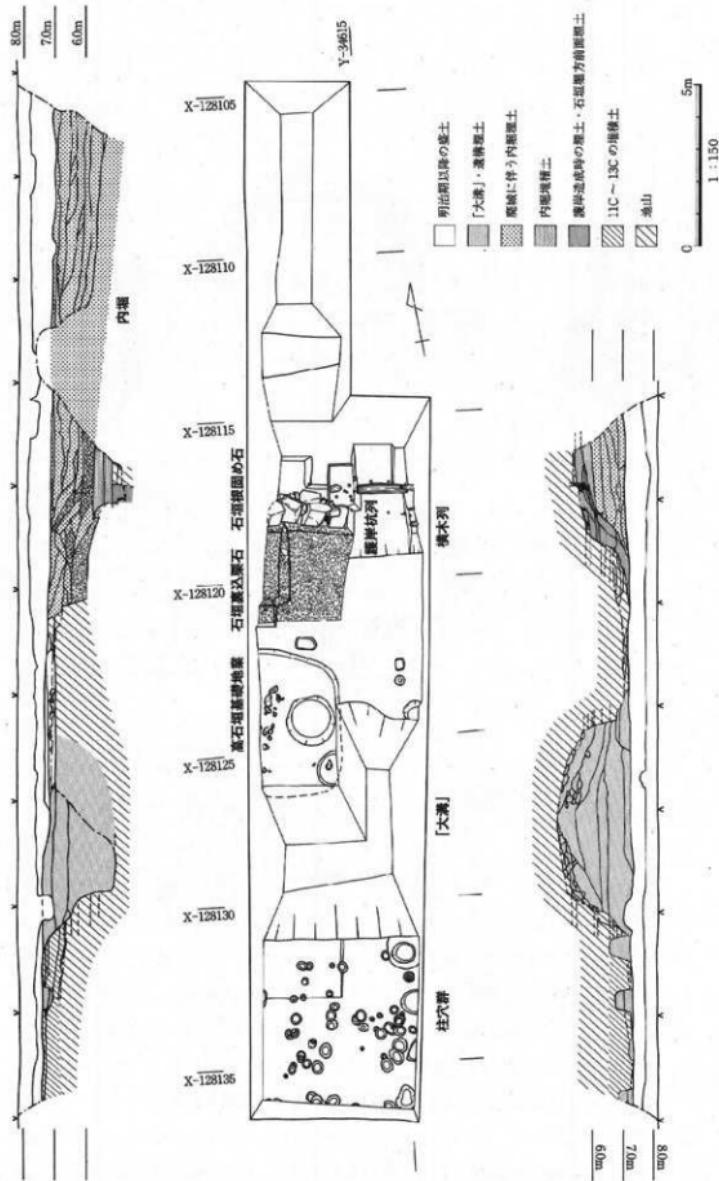


図17 1トレンチ平面図・土層断面図

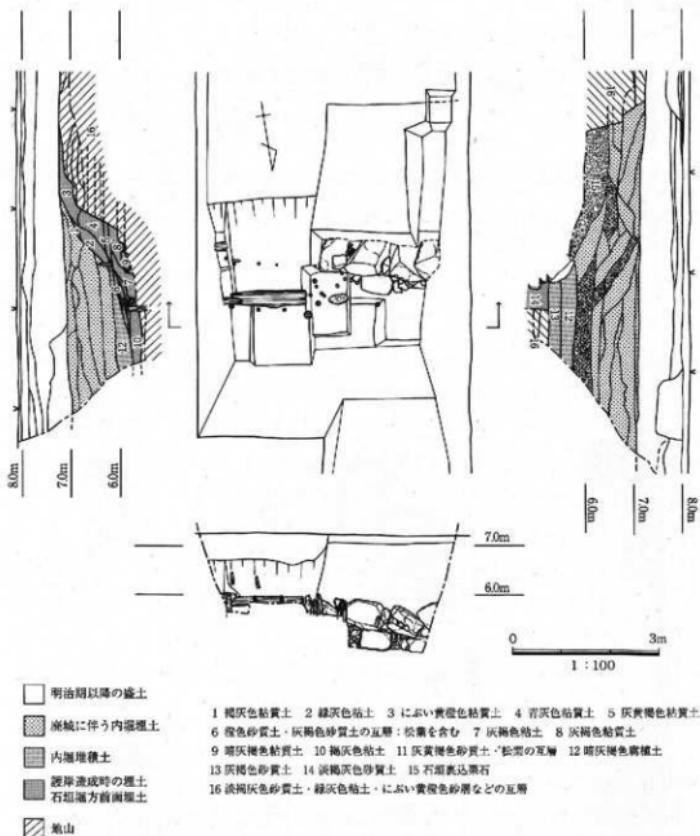


図18 1 ドレンチ 石垣・内堀護岸平面図・土層断面図

3cm 間隔にあけられていた。石は相互に多少のズレがみられるが、概ね、面を揃えており、その傾斜角は約70度である。石材は昭和50年に調査された本丸の石垣（『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』参照）と同じく小豆島・六甲や笠置産の花崗岩である。今回検出した石垣は、本丸の石垣に比べて小さく、また隙間が多いことから石垣本体ではなく、石垣の前面に置かれた根固め石と推定される。根固め石の内側にあった石垣本体は明治7（1874）年に鉄道建設など転用され残存しないものと推定される。

根固め石の南側の堀方内には裏込めの栗石が充填されており、直径10～20cmの河原石や一辺10～30cmの花崗岩の破材が用いられていた。石垣が抜き取られた際に裏込めの栗石が崩され、根固め石上面から内堀に広く堆積し、その栗石内からは江戸時代の瓦・

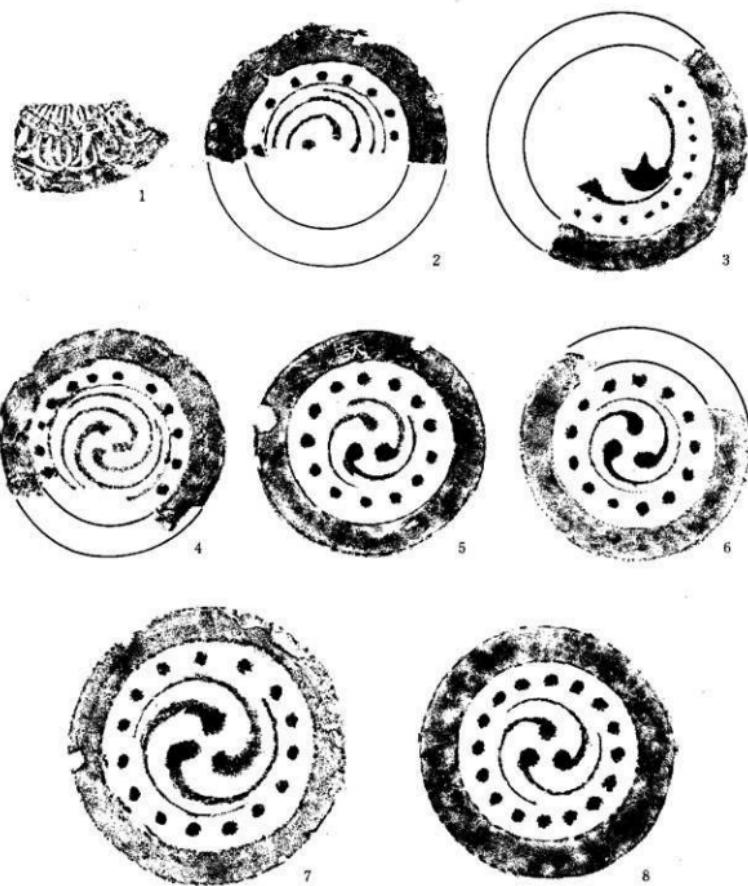


図19 1 トレンチ 内堀出土軒丸瓦 (1・2・4・6:崩落した石垣裏込栗石内 3・5・7・8:内堀堆積土)



図20 1トレンチ 内堀出土軒平瓦 (1・6・7・8・9:崩落した石垣裏込石内 2・3・4・5・10・11:内堀堆積土)

陶磁器が出土し、中には平安時代の軒丸瓦も1点出土した。

高石垣基礎地業は、石垣掘方の南約1mで検出した。西側は調査区外に続いているが、南北4.5m、東西2.4m以上、深さ22cmの掘方をもつ。掘方の中央部には10~45cmの河原石や花崗岩破材が南北に列状に集中していた。石列の東辺から掘方東端までの約1.6m、石列の北辺から掘方北端までの約1mには石がないことから、もともとは石垣石が置かれていたと推定される。

内堀 内堀に関する遺構としては、不明門石垣根固め石から続く横木列、護岸杭列を検

出した。横木列は標高6.0mで検出し、直径30cm、長さ約1.5mの自然木を用い、堀底側に直径約7cmの杭を50cm間隔に打ち固定している。横木列の約1m南側で、45cm高い位置にも35~50cm間隔に杭が確認できることからもともとは横木列があったものと思われ、上・下2段の横木列があったものと推測される。下段の横木列の裏には松葉が敷き詰められていた。横木列と石垣との境には約50cmの隙間があり、その間は直径約10~15cmの杭を不規則に打ち、護岸としているところとみられる。また、東端での断面調査では上段横木列の下約45cm、標高6.0mの位置に直径約15cmの横木、直径約5cmの杭が確認されている。横木は地山を掘り込んで置かれていることから法面の補強のために造られたものと推測される。内堀堆積土からは江戸時代の瓦、陶磁器のほか石仏も出土している。

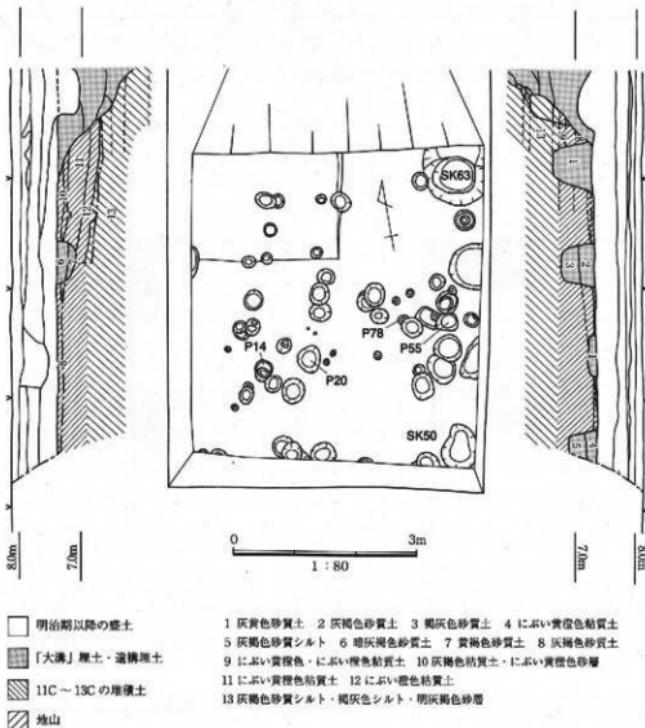


図21 1トレンチ 南側柱穴群平面図・土層断面図

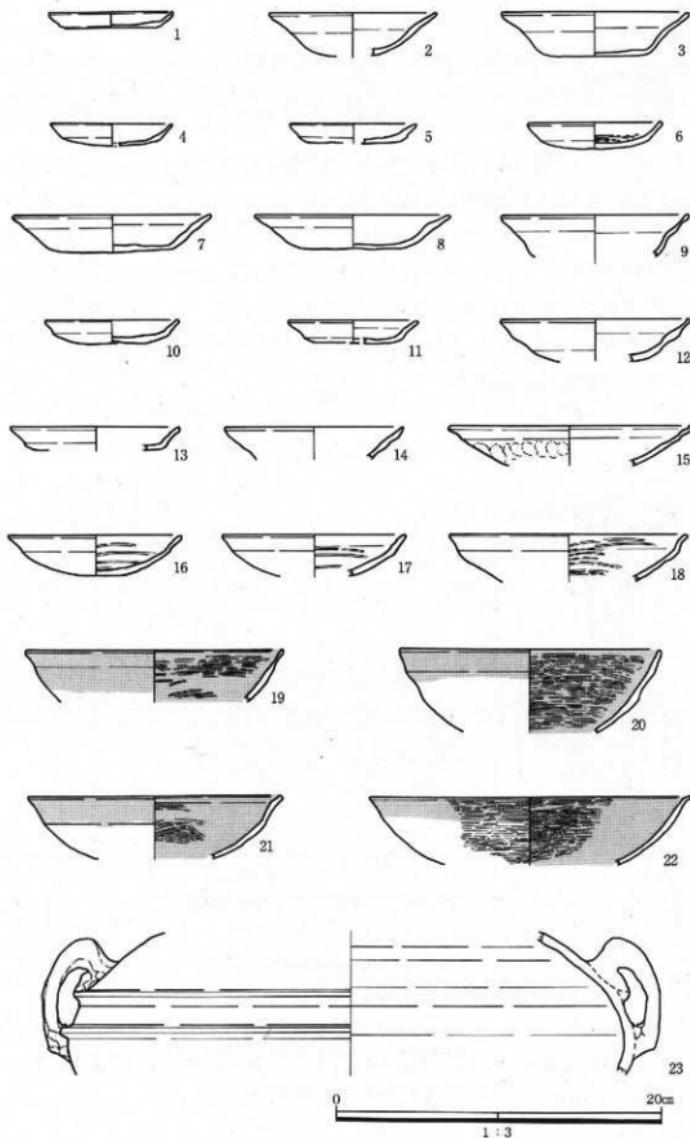


図22 1トレンチ 南側柱穴群出土土器
(1・2:P14 3:P55 4~9:P20 10~12:P78 13~18:SK50 19~23:SK63)

「大溝」「大溝」は高石垣の基礎地業の南側に重複して検出した。東西方向にあり、幅は上面で約6.8m、下面約5.0mで、深さ約2.2mを測り、断面がU字状を呈する。溝の斜面には砂層が露出する部分が多く、粘土塊で補強している状況が確認できた。内堀の内側に位置することから、江戸時代以前の溝と考えられる。今までに確認されている高山右近期の溝の特徴的な埋められ方とは異なることから、和田惟政期のものと考えられる。埋土からは弥生中期の土器片、13世紀末～14世紀初めの瓦器・土師皿片、15世紀の青磁片などが出土した。

柱穴群 柱穴群は調査区南端部で確認した。標高は7.4mである。柱穴は直径25～45cmのものが大半を占め、直径80～120cmの土塊や直径10cm前後の杭跡と思われるものもある。埋土から瓦器・土師皿が出土しており、大半は13世紀末～14世紀初めものと考えられるが、瓦を含む16～17世紀代のものも混在している。また、柱穴群からは9世紀末から13世紀の土器も出土しており、周囲に当該時期の遺構があるものと推定されたため、一部を掘り下げて確認したところ、下層の遺構から10世紀末から11世紀初頭の土師皿片・黒色土器片が確認できた。

4.2 トレンチ（図23・24 図版第8）

2トレンチでは、近世高櫻城に関連する遺構として竹樋管を用いた導水施設、矢板列を検出し、戦国時代の遺構としては「大溝」を検出した。

導水施設 導水施設は長さ6.35m、直径6～8cmの節を抜いた竹（竹樋管）を木製継手で接続し、終端は地上へ導くため継手の上に瓦質管を立てて保護している。竹樋管は標高6.8m～7.0mで検出した。西側は調査区外に続いており、検出長は約7.1mで、幅約50cmの掘方に据えられている。竹樋管の上面の標高は西側で6.8m、東側で6.5mであり、西から東へ傾斜している。木製継手は竹樋管の接続部に取り付けられたもので、2ヶ所で検出した。西側で検出した継手は長さ30cm、直径約15cmの丸太の側面を面取りし、面取りをした側面に直径約7cmの穴を開けたものである。東側の終端部にある木製継手は一辺17～20cm、長さ33cmの角材を使い、端面はすべて面取りしている。側面と上面の2方向には約6cmの穴を開けている。上面の穴には上部方向に竹樋管が接続し、水を上部へ導く構造とみられる。上部方向の竹樋管の外側は瓦質管で覆っている。瓦質管の直径は18cmで、隙間には1～5cmの小石を充填している。瓦質管の現存長は24cmで、上部は既に失われていた。導水施設は三ノ丸東郭の武家屋敷跡の調査でも検出しておらず、親井戸から溜井戸をつなぐ竹樋管、継手、溜橋を確認している。（『平成5年度 高櫻市文化財年報』参照）

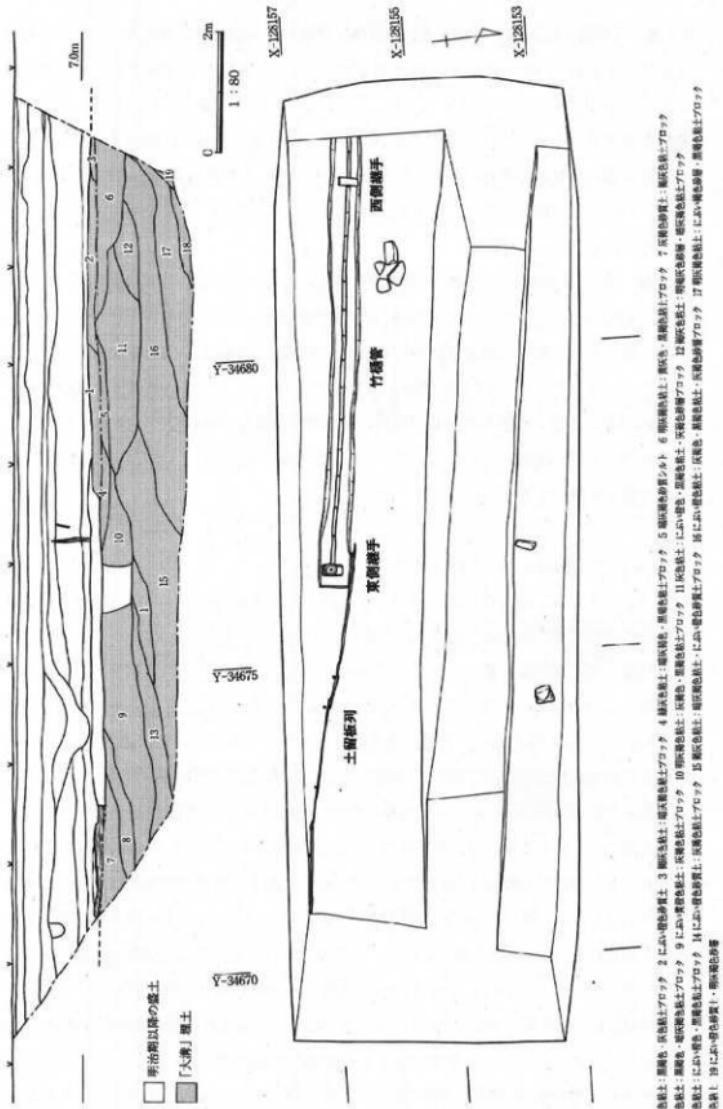
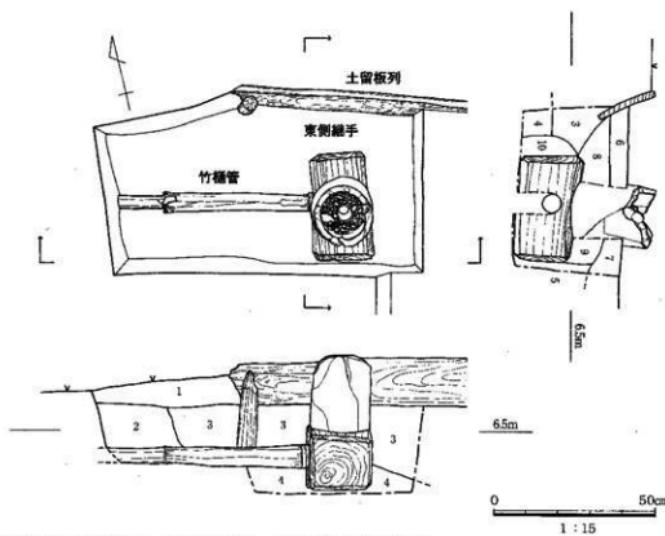


図23 2トレンチ 平面図・土層断面図



1 広褐色粘土・黒褐色粘土ブロック 2 広褐色粘土 3 明灰褐色砂層 4 広褐色粘土
5 にぶい黄褐色砂層 (1~5: 大量埋土) 6 黄灰色砂質シルト 7 にぶい黄褐色粘土
8 広黄褐色砂質土 9 増灰褐色粘土 10 種灰褐色粘土

図24 2トレンチ 導水施設東側縦手平面図・土層断面図

土留板列 土留板列は、標高7.8mで検出した。導水施設の東端から北約30cmの位置から東に延びており、検出長は約6.1mである。横板は長さ2.0~2.6m、高さ約20cm、厚さ3~4cmのものを1枚立てて、板の南側には直径約6cmの杭を板の両端に打ち土留をしている。導水施設の終端部から始まり、ほぼ同一の方向にのびることから導水施設と関係する遺構と考えられる。

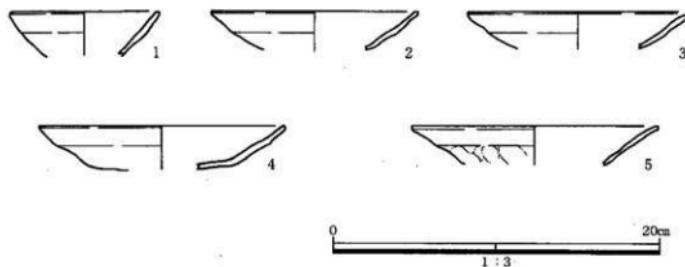


図25 3トレンチ 土壌出土遺物実測図

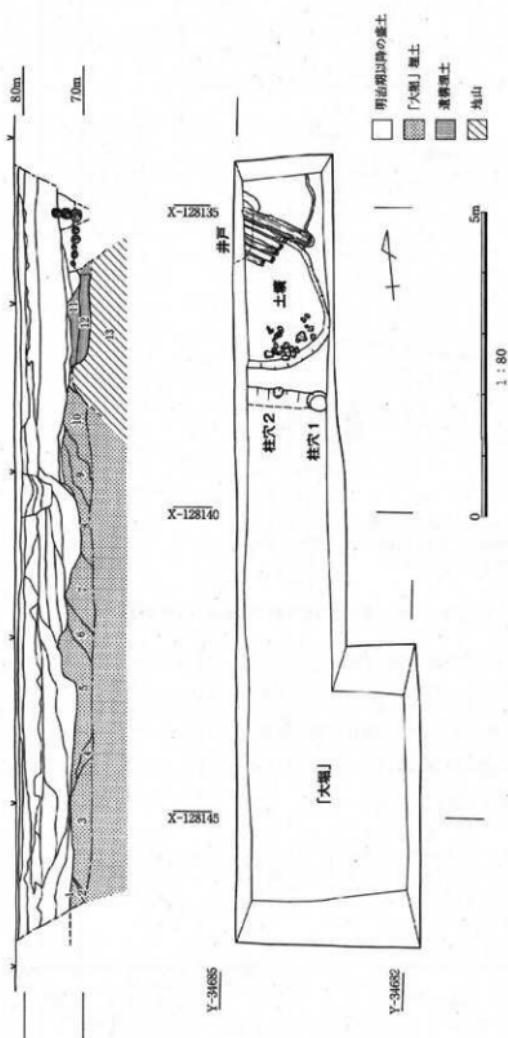


図26 3トレンチ 平面図・土層断面図

- 1 黒灰色土：黒褐色粘土プロック 2 にぶい灰色砂糖 3 黄褐色粘土：黒褐色 4 にふい褐色砂糖土：黒褐色・灰褐色粘土プロック 5 褐色砂糖土：黒褐色・灰褐色粘土プロック 6 にぶい褐色砂糖土：黒褐色・灰褐色粘土プロック
- 7 黑褐色土：黒褐色土プロック 8 灰色砂糖土：黑褐色 9 にぶい褐色砂糖土：黒褐色・灰褐色粘土プロック 10 灰褐色砂糖土：灰褐色 11 黑灰色土：黒褐色・灰褐色粘土プロック
- 12 褐水色砂糖土：灰含土 13 黑水色砂糖土

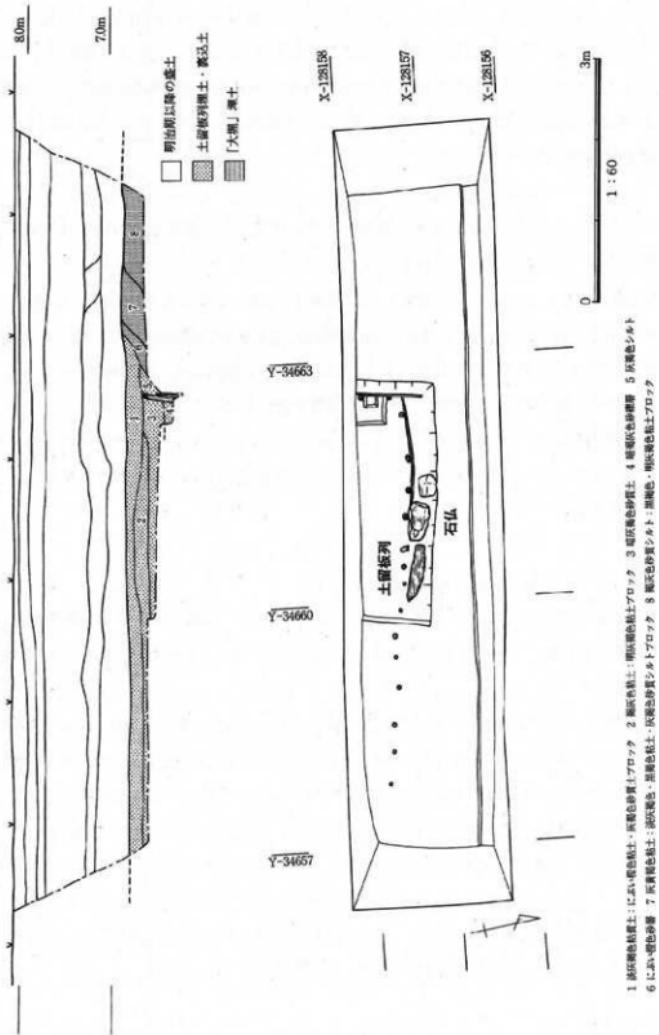


図27 4トレンチ 平面図・土層断面図

「大堀」「大堀」は2トレンチ全域と後述する3トレンチの両半部、4トレンチ全域で確認できたものであり、総合的に判断すると、幅19m以上、深さ1.5m以上の東西方向の大規模な堀で、約26.8m分を確認した。埋土は土塊の単位がうかがえる特徴的なもので、こうした状況は三ノ丸東郭外堀跡（『平成12年度 高槻市文化財年報』参照）、帶曲輪（H21年度調査）で確認した元和3（1617）年の公儀修築時に埋め立てられた高山右近期の堀と同様の埋められ方である。

5. 3トレンチ（図25・26 図版第9）

3トレンチでは、2トレンチで確認された「大堀」の北肩部、室町時代の柱穴、戦国期の土壙、明治時代以降の井戸を検出した。

「大堀」「大堀」の北肩部を確認した。標高は7.25mで検出し、傾斜角は45度である。

戦国期の土壙 「大堀」の北側約0.3mで検出した。西側は調査区外になり、北側は明治時代以降の井戸があるため規模は不明ではあるが、直径約2m、深さ約0.3mの土壙と推定される。埋土中から15世紀後半頃の土師皿が出土している。

室町時代の柱穴 「大堀」の肩部で確認できたもので、直径17cmと38cmの2つを検出した。遺物は出土していないが、1トレンチで確認されている柱穴群と同時期のものと推測される。

6. 4トレンチ（図27 図版第10）

4トレンチでは、2トレンチで確認された「大堀」、土留板列の広がりを確認した。

「大堀」「大堀」はさらに東側にのびることを確認した。「大堀」埋土内から石仏が出土している。

土留板列 土留板列はT字形で検出し、東西方向は4.9m、南北方向は0.8m分を検出した。南北方向の土留板は長さ0.8m以上、高さ9～12cm、厚さ2cmの薄い板である。板3枚以上を並べ、東側に約30cm間隔に直径約6cmの杭を打ち土留めしている。東西方向の土留板は長さ1.5m以上、高さ8cm以上、厚さ2cmの薄い板で、南側に17～50cm間隔に直径約6cmの杭を打ち土留めしている。2トレンチで確認した土留板とは横板の枚数、厚みや杭の間隔が異なることから直接つながるものではないと考えられるが、東西方向の土留板列が2トレンチの土留板列とほぼ同一の方向にのびることから導水施設と関係する遺構とも考えられる。

7. まとめ

江戸時代の高槻城については、石垣根固め石、高石垣基礎地業を検出したことにより、

高櫻城絵図に記載されている二ノ丸不明門の正確な位置がはじめて判明した。一方、二ノ丸城主御殿に直接関わる遺構は検出できず、礎石などはすでに削平され失われているものと推定される。しかし、地下に構築されていた導水施設などの遺構が確認されたことにより、御殿の概況を知る手がかりを得ることができた。

戦国時代の高櫻城に関しては「大溝」・「大堀」の2条の東西方向の堀跡を検出した。特に2・3・4トレンチで検出した「大堀」は、埋め立てられた状況から高山右近が築いた高櫻城の遺構と考えられる。

戦国時代以前では室町時代の柱穴群、平安時代の柱穴も確認しており、弥生土器も出土していることから、各時代の集落が周囲に存在しているとみられる。 (西村)

V. 出土遺物保存処理

平成22年度は、安満遺跡で出土した木製品と、史跡今城塚古墳および弁天山古墳群で出土した金属製品の保存処理を委託事業として実施した。

安満遺跡出土の木製品は平成20年度の範囲確認調査で出土したもので、遺存状況が良好な7点について、高級アルコール法による保存処理を実施した。

遺跡名	番号	遺物名	法量(cm)		
			長辺	短辺	厚さ
安満遺跡	1	鉄	35.8	19.0	5.0
	2	鉄	30.9	6.8	5.0
	3	鉄	34.5	6.1	5.0
	4	鉄	34.0	9.0	1.2
	5	斧柄	49.0	26.0	4.0
	6	不明木製品	24.0	13.0	2.5
	7	刀形	8.0	2.0	1.0

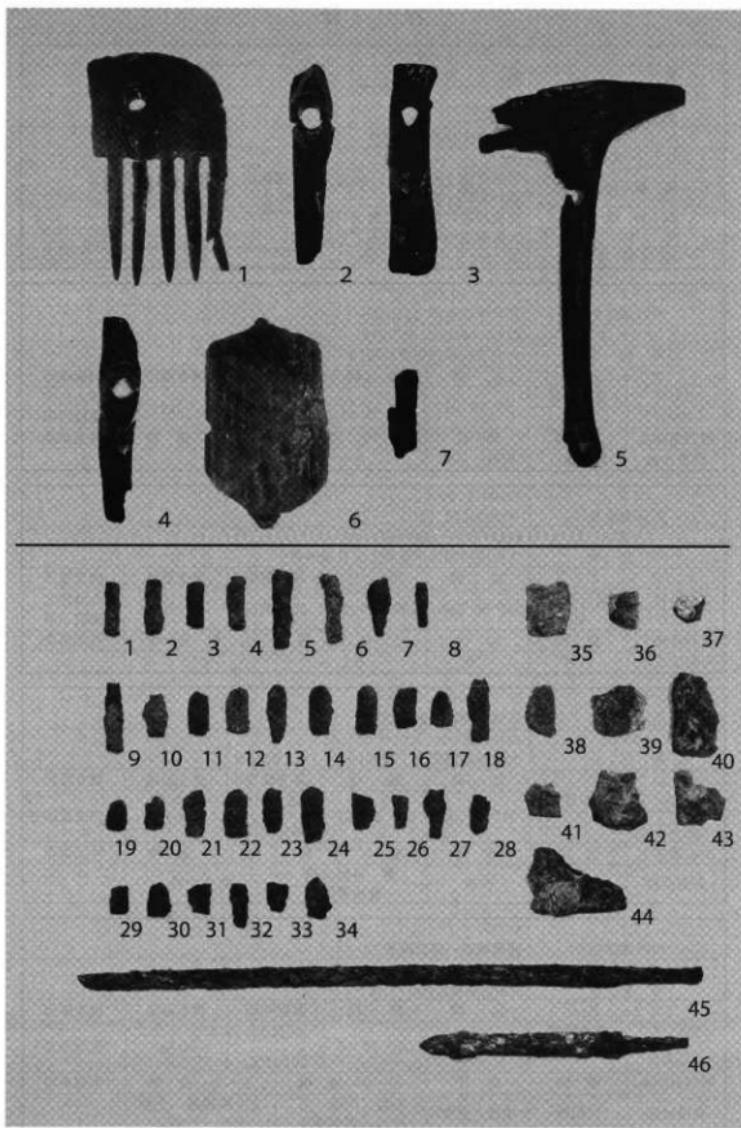
表1 平成22年度保存処理実施木製品一覧

史跡今城塚古墳出土の金属製遺物は規模確認調査において出土したもので、大半は5cm以下の小破片となっており、今回鉄鎌34点、甲冑片10点の総点数44点を処理対象とした。また1963年の弁天山古墳群の発掘調査において出土した鉄刀2点をこれに加えた。これらの遺物は、鏽等による腐食が進行しているとみられ、早急な対応が必要であることから、樹脂含浸による保存処理を実施した。

古墳名	番号	遺物名	法量(cm)	
			長辺	短辺
今 城 塚 古 墳	1	鉄鎌	3.2	0.8
	2	鉄鎌	3.3	1.1
	3	鉄鎌	2.6	1.0
	4	鉄鎌	3.0	1.1
	5	鉄鎌	4.6	1.3
	6	鉄鎌	4.1	1.1
	7	鉄鎌	3.5	1.1
	8	鉄鎌	2.8	0.8
	9	鉄鎌	4.1	1.0
	10	鉄鎌	2.4	1.1
	11	鉄鎌	2.7	1.1
	12	鉄鎌	2.6	1.2
	13	鉄鎌	3.6	1.1
	14	鉄鎌	3.0	1.3
	15	鉄鎌	2.9	1.2
	16	鉄鎌	2.5	1.3
	17	鉄鎌	2.2	1.2
	18	鉄鎌	4.0	1.0
	19	鉄鎌	2.0	1.2
	20	鉄鎌	2.1	1.1
	21	鉄鎌	2.7	1.1
	22	鉄鎌	3.0	1.2
	23	鉄鎌	2.9	1.1
	24	鉄鎌	3.5	1.2

古墳名	番号	種別	法量(cm)	
			長辺	短辺
今 城 塚 古 墳	25	鉄鎌	2.3	1.2
	26	鉄鎌	2.1	0.9
	27	鉄鎌	3.1	0.9
	28	鉄鎌	2.7	1.0
	29	鉄鎌	1.6	0.9
	30	鉄鎌	2.0	1.2
	31	鉄鎌	1.9	1.2
	32	鉄鎌	2.7	1.0
	33	鉄鎌	1.7	1.1
	34	鉄鎌	2.7	1.3
	35	甲冑片	4.0	3.2
	36	甲冑片	3.0	2.1
	37	甲冑片	2.4	1.9
	38	甲冑片	2.5	1.4
	39	甲冑片	2.5	2.2
	40	甲冑片	3.4	1.7
	41	甲冑片	2.2	2.2
	42	甲冑片	3.6	3.5
	43	甲冑片	3.5	3.0
	44	甲冑片	6.8	5.2
弁 天 山 群	45	鉄刀	98.0	3.4
	46	鉄刀	33.8	3.2

表2 平成22年度保存処理実施金属製品一覧



抄 錄

フリガナ	シマガミイセキグン				
書名	鳴上遺跡群				
副書名					
巻次	35				
シリーズ名	高槻市文化財調査概要				
シリーズ番号	38				
編集者名	宮崎康雄 高橋公一 橋本久和 早川圭 内田真雄 今西康宏 西村恵祥 漢野俊一				
編集機関	高槻市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター				
所在地	大阪府高槻市南平台五丁目21-1				
発行年月日	2011年3月				

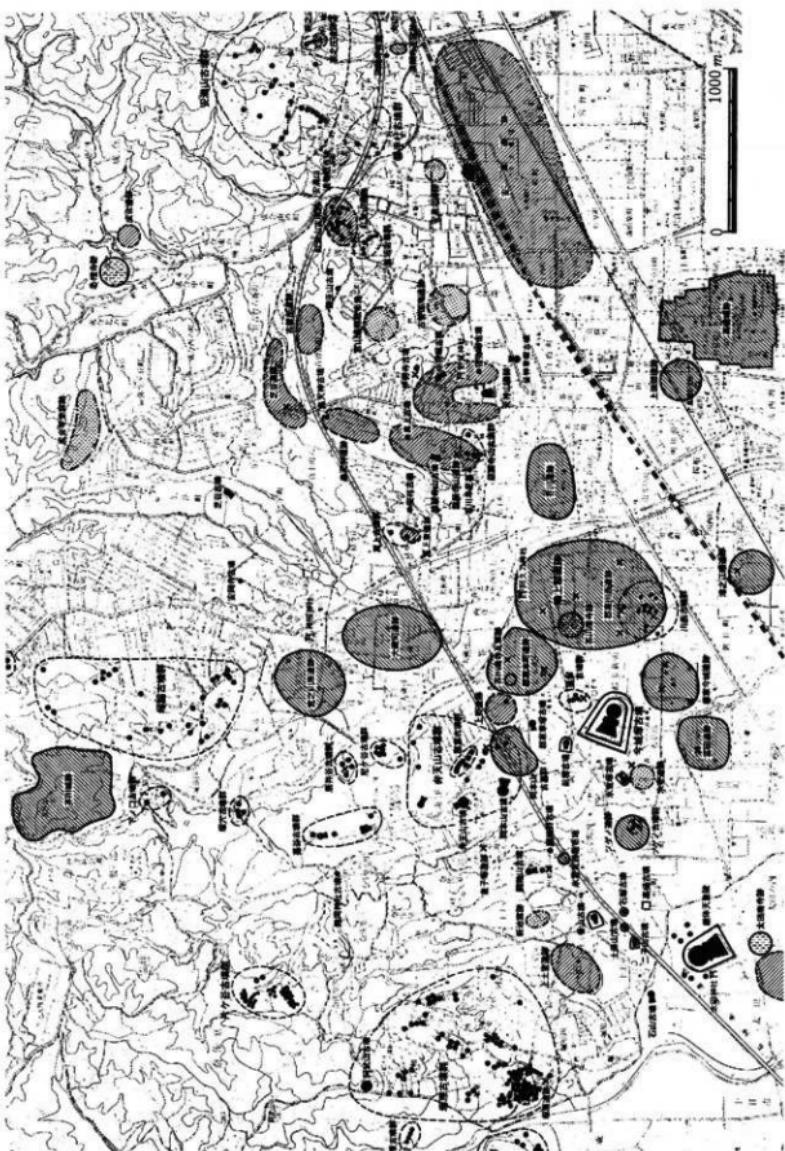
フリガナ	ゲンノウイセキ				
所収遺跡名	郡家今城遺跡（2010-1）				
フリガナ	カタカタカシグンノウイセキ				
所在地	大阪府高槻市郡家新町147-8				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
27207	42	34° 50' 51"	135° 35' 57"	20100723	2m ² 個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡家今城	集落	奈良・平安	なし	なし	

フリガナ	イマヨロカコソ				
所収遺跡名	今城塚古墳（2010-2）				
フリガナ	カタカタカシヒロコウイツコウ				
所在地	大阪府高槻市水室町1丁目564番1				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
27207	40	34° 50' 58"	135° 35' 32"	20100525	13m ² 共同住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今城塚古墳	古墳	古墳	なし	なし	

フリガナ	アマイセキハシキニンチオウ				
所収遺跡名	安満遺跡（範囲確認調査）				
フリガナ	カタカタカシヒンチオウ				
所在地	大阪府高槻市八丁暖町196-1、197ほか				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
27207	83	34° 51' 34"	135° 37' 42"	20100510 20100617	140m ² 範囲確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安満遺跡	集落	弥生	溝 自然流路 畦状遺構	弥生土器	

フリガナ	カタカシヒウツ				
所収遺跡名	高槻城跡（確認調査）				
フリガナ	カタカタカシヒンチオウ				
所在地	大阪府高槻野見町1492-1				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号				
27207	85	34° 50' 40"	135° 37' 16"	20100525 20100730	304m ² 確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高槻城跡	城館跡	中世 近世	石垣 内堀 溝 柱穴 導水施設	瓦 陶磁器 土器 石仏 竹機管	

図 版



鷲上都衙跡とその周辺



a. 安満遺跡航空写真〔京大農場〕

(南西側から)



b. A-4 トレンチ全景

(北側から)



a. 5トレンチ全景

(東側から)



b. A-9トレンチ全景

(西側から)



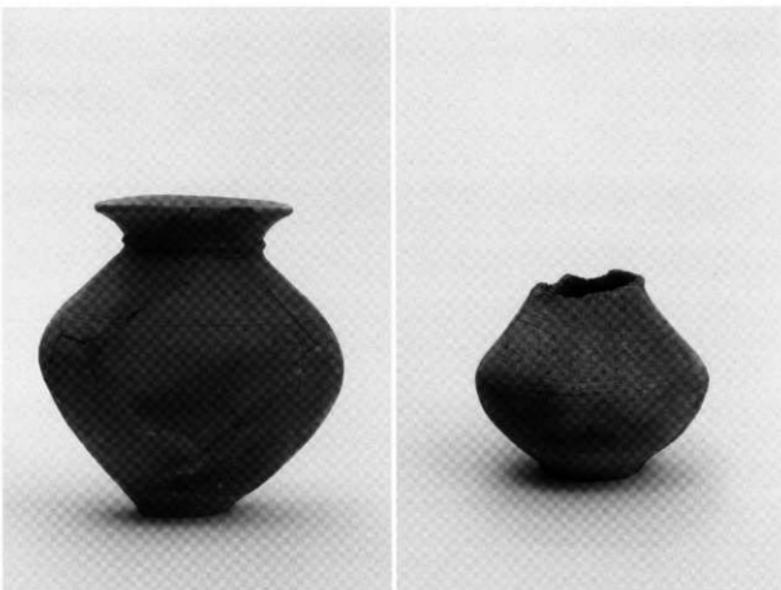
a. A-3 トレンチ全景

(南東側から)



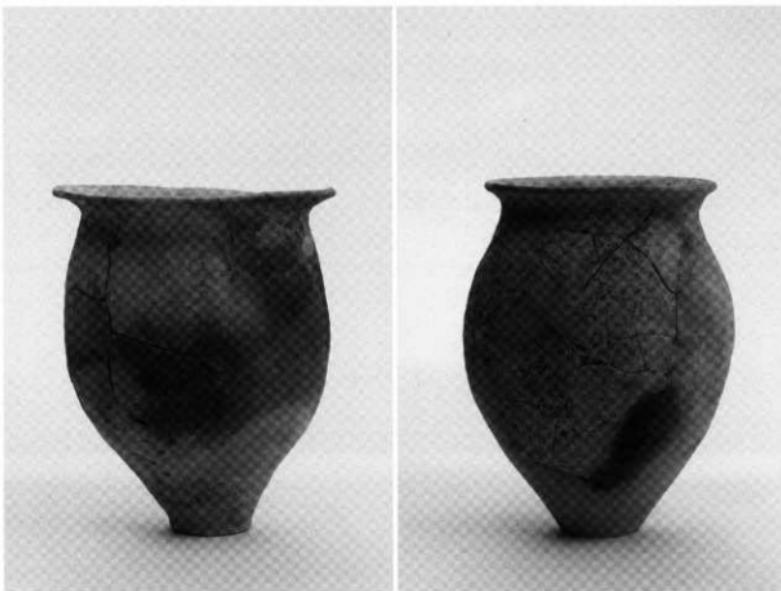
b. A-5 トレンチ全景

(東側から)



a. 3-2トレンチ溝5出土 壺(1)

b. 3-2トレンチ出土 壺(2)



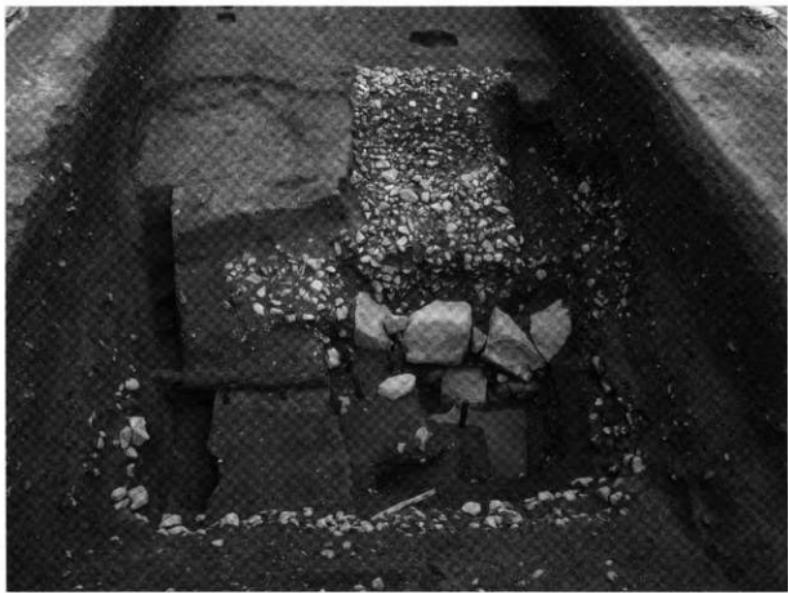
c. 5トレンチ方形周溝墓1出土 壺(34)

d. 5トレンチ方形周溝墓2出土 壺(35)



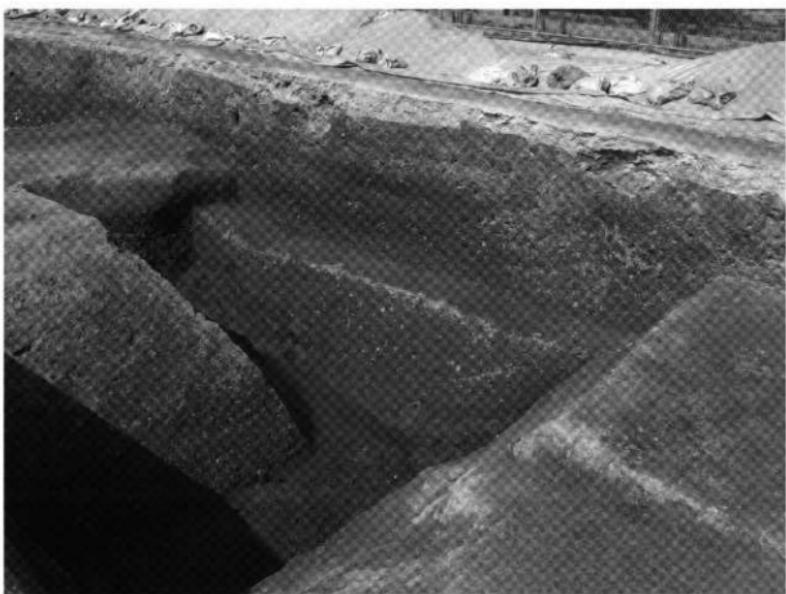
a. 1トレンチ 全景

(北側から)



b. 1トレンチ 内堀検出状況

(北側から)



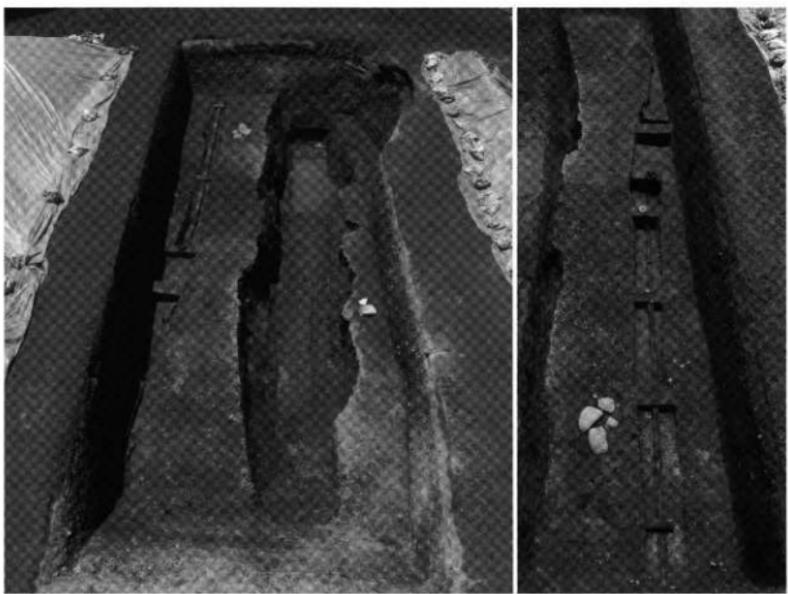
a. 1トレンチ 「大溝」検出状況

(南西側から)



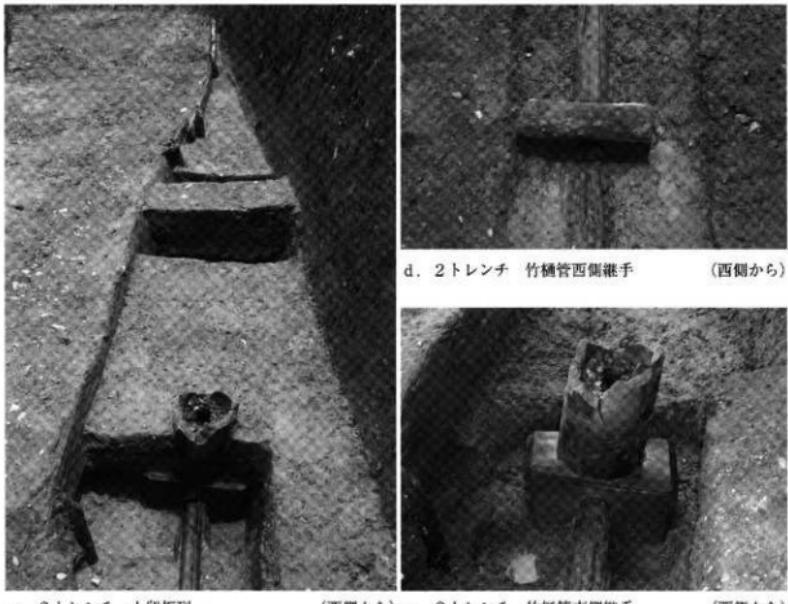
b. 1トレンチ 柱穴群検出状況

(南側から)



a. 2トレンチ 全景

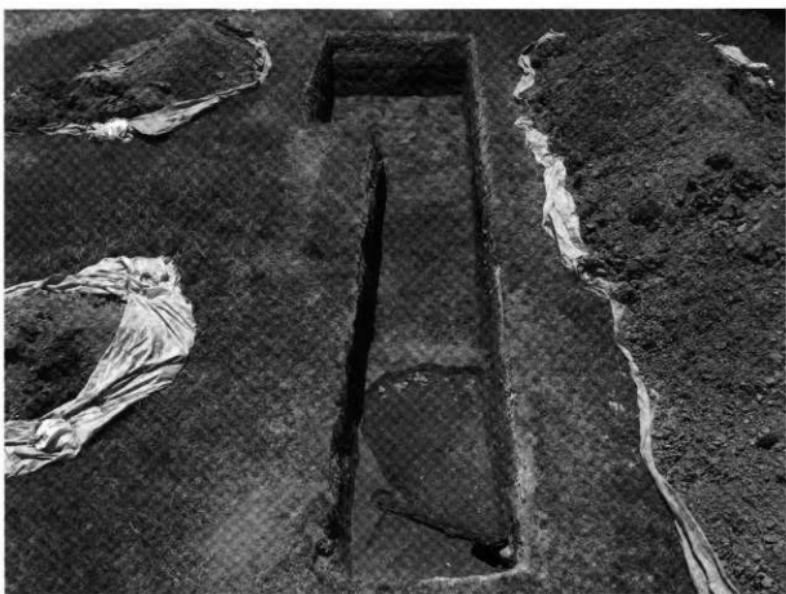
(東側から) b. 2トレンチ 竹桶管 (西側から)



c. 2トレンチ 土留板列

(西側から) e. 2トレンチ 竹桶管東側縦手

(西側から)



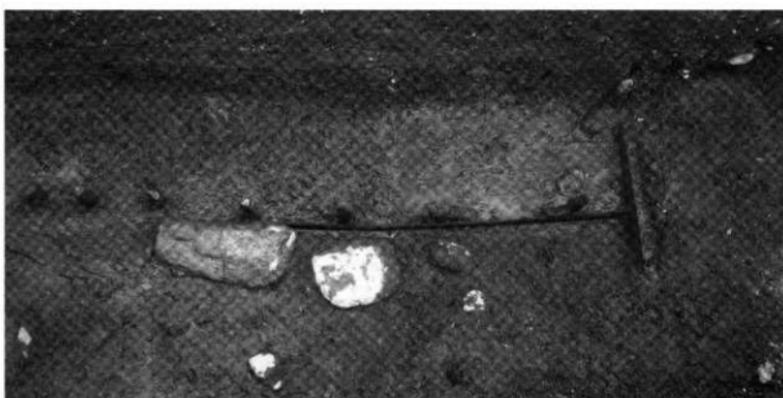
a. 3トレンチ 全景

(西側から)



b. 3トレンチ 全景

(南東側から)



高槻市文化財調査概要 38

鳴上遺跡群 35

平成 23 年 3 月 31 日

発 行 高 橋 市 教 育 委 員 会
文化財課 埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台五丁目21番1号

印 刷 株式会社 邦 文 社
大阪市東淀川区大隅1丁目5番2号



再生紙を使用しています